

IV-56

自己認識が居住地選択行動に与える影響についての考察

東北工業大学 学生員 ○中居 良行
東北工業大学 正会員 青木 俊明

1.はじめに

これまでの居住地選択モデル¹⁾²⁾では、アクセシビリティ（時間・距離）、地価、住宅タイプ・世帯タイプなどを主要因とした居住地選択が想定されている。しかし、実際の居住地選択では、街並み、人間関係、雰囲気、景観など、居住地環境の質的特性を考慮して選択を行っていることも少なくないと思われる。そのため、これら物理的な要因のみで居住地選択を説明することには限界があると思われる。例えば、郊外の高級住宅地などへの立地は、アクセシビリティの悪さや、利便性の低さを考えれば、物理的要因のみで説明することは難しい。この例からも分かるように、居住地選択には質的特性が影響していると考えられる。従って、図-1に示すように、居住地選択の意思決定機構を考える際には、物理的要因以外の要因についても考慮する必要があると言える。そこで本研究では、非物理的要因が居住地選択においてどのように作用しているのかについて試論を行う。

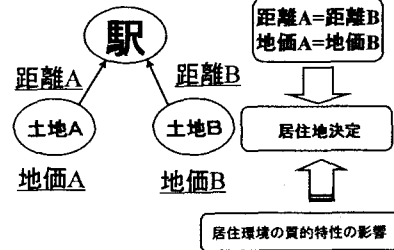


図-1 物理的要因と質的特性の作用の模式図

2.自己認識の重要性

社会心理学では意思決定の際に、自己認識が重要な役割を果たすことが知られている³⁾。自己認識（自分自身に対する認識＝自己プロトタイプ）とは「自分は〇〇な人間である」という意識である。自己に対する認識は自己以外の認識に比べ、接近可能性⁴⁾が高く、さまざまな判断に影響を与える³⁾。このことより、あらゆる選択・判断の意思決定の際に、自己認識は影響があると言える。従って、居住地の選択においても同様に自己認識は作用していると考えられる。

3.プロトタイプマッチング戦略とは

「車の購入」、「職業の選択」、「学校の進路」、「洋服の購入」など、選択の際には、自己認識と選択対象物の認識は密接に繋がっていることが報告されている³⁾。これらの報告によれば、人は自己認識と選択対象物に対して持っている認識を対比させた上で、意思決定を行っているという。すなわち、自己認識と選択対象物に対する認識の相関が最も大きいものを選択している。この考えをプロトタイプマッチングという⁴⁾。

プロトタイプマッチングが用いられる理由として、選択の際に費やす認知的負荷⁵⁾が小さくなることが挙げられると同時に、認知的不協和⁶⁾の回避にもつながる。さらに、プロトタイプマッチングが作用すると、自分が選択した対象物は自己認識を反映しやすいものになるため、選択判断後も自己認識を維持しやすくなる。

4.居住地選択におけるプロトタイプマッチングの効果

(1) 既存研究

ニーデンサーラらは、住居形態の選択を題材にして、プロトタイプマッチングの有効性を検討している。実験では、自己認識と7つの住居形態（アパート、一戸建、学生寮など）の居住者に対するイメージについて、新居を探している学生に評定させた。その際、性格特性⁷⁾とセルフモニタリング⁸⁾に着目しつつ、プロトタイプマッチングの有効性を検討している。

その結果、性格特性が多く、セルフモニタリングが低い人に、プロトタイプマッチングが用いられやすいことが認められた。しかし、選択目的が経済条件重視の場合には、プロトタイプマッチングの作用頻度が低いことが認められた。これは、選択者のプロトタイプマッチングの作用には個人差があり、自己認識の明確な選択者ほど、プロトタイプマッチングが強く作用していることを示唆している。

(2) 居住地区選択におけるプロトタイプマッチングの影響

居住地選択を行う際、居住地区も住居形態と同様に選択対象になるため、自己認識と選択対象物の認識は密接な関係があると考えられる。そのため、プロトタイプマッチングは居住地区の選定においても作用していると考えられる。

ニーデンサールに従えば、性格特性が多く、セルフモニタリングの低い選択者は、居住地区選定の際に自己認識に一致する雰囲気や人間関係など、居住地区の質的特性を重視する。そのため質的特性を第一に考えると思われる。次に経済条件を考え、自己認識と一致した居住地区内で経済条件に見合う場合に立地すると考えられる。一方、性格特性が少なく、セルフモニタリングの高い選択者は、居住地区選定の前に経済条件、立地条件などを重視する。そのため、経済条件を第一に考える。次に経済条件、立地条件内で自己認識に近い質的特性を持った居住地区の中に立地すると考えられる。これらをまとめれば図-2に示すような選択のプロセスになる。

ところで、同じ居住地を選択した選択者同士は、自己認識が類似している可能性が高いと考えられる。その結果、そのような居住地は、特定の質的特性を形成する。それによって地区の雰囲気も形成されると考えられる。

今後の課題としては、アンケート調査や心理実験により、居住地区ごとの住民の自己認識を明確にする必要があると考えられる。

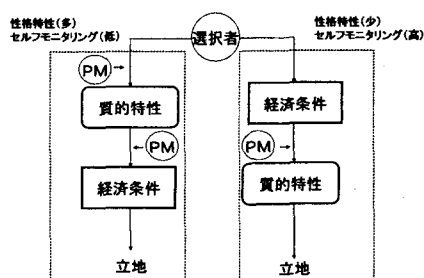


図-2プロトタイプマッチングの作用の模式図

注1：接近可能性

思いつきやすさ、検索のしやすさ

注2：認知的負荷

探すべきこと、覚えるべきこと、選ぶべきこと、推論すべきことをできるだけ低減すること。

注3：認知的不協和

自分の中に、互いに矛盾する二つの重要な情報がある時、心理的に不快な緊張状態に陥ること。

注4：性格特性

性格特徴の中で一貫して出現する行動傾向や、そのまとめり。

注5：セルフモニタリング

自己の内面的現実と外装的な装いの落差の大きさ。

セルフモニタリング高→周囲の影響を受けやすく、それに合わせ自分を変えようとする。

セルフモニタリング低→周囲の変化を気にせず、自分自身を貫こうとする。

参考文献

- 1) 宮本和明・安藤淳・清水英範：非集計行動分析に基づく都市圏住宅需要モデル，土木学会論文集，第365号/IV-4，pp.79-88，1986.
- 2) 林良嗣・富田安夫：マイクロシミュレーションとランダム効用モデルを応用した世帯のライフサイクル・住宅立地・人口属性構成予測モデル，土木学会論文集，第395号/IV-9，pp.85-94，1988.
- 3) 山本眞理子・外山みどり：社会的認知，誠信書房，1998.
- 4) P.M.Niedenthal Prototype Matching: A strategy for Social Decision making, Journal of Personality and Social Psychology, vol48, No.3, 575-584,1985.